

から、近ごろ優の字も書けない先生がいるなどと笑いのにされたら大変なので、まだ実行したことはない。

しかし考えてみれば、この世はまさに憂トピア、受験生はいうに及ばず、教官の方も出題や採点ばかりか、入試制度が変更されるたびに、膨大な時間を奪われる。退官して何が一番嬉しかったかといえ、そんな業務から解放されたことである。

おかげで少しは暇もできたので、老いの身空もかえりみず、わがユートピア物語を書いてみる気になったのである。その動機は大人げないが、先日ふとテレビをつけたら、著名な評論家が、「房総半島に運河を掘り、その土で東京湾を埋めたてよ」とのたもうた。「なんだ今さら、我輩はもう20年以上も前に、日本地域開発センターの研究会で提唱したことがあるぞ」と家内に言っても、てんで相手にされなかった。やはりどこかにちょっとでも書いておけばよかった。級友の高崎正義君なら、「お前はロマンチストだから、そんなことも言ってたかもしれない」と慰めてくれたかもしれない。その当時、ちゃんと五万分の1の地形図で、集落のない帯状の適地をあたり、掘り出した土砂で九十九里の遠浅海岸を埋め立て、飛行場と工業地帯や海上公園を作りそれによって東京湾の水もきれいになるし、出入する船舶の衝突事故もへるであろうと空想したものである。だが、鹿島臨海工業地帯の造成費をはるかに上まわる、そんなプロジェクトは誰も本気にしてくれなかった。今では地価は上がったし、補償問題もいっそう厄介だし、なお当分は夢物語にとどまるであろう。

それから約10年後の1972年にストックホルムで、国連主催の第一回人間環境会議が開かれた。それに先立ち担当事務局長は、各国の諸機関に6項目の議題について予め意見を求めた。これをうけて日本地域開発センターにも、「環境問題提言委員会」が設けられ、私も

そのメンバーに加えていただいた。その時、多少テレながら提案した内容は、1975年の小論に記し、ついでUP選書「地球人の環境」(1977)にも再録してしまった。いままたその中から、再度提言したい夢がある。すなわち、太平洋中の比較的大きな未開の島に“Geotopia”を建設し、そこに国連諸機関を集中する。そこには大規模な国際孤児院をつくり、戦災孤児たちを最初の固有市民として、その中からできるだけ多くの国連職員も採用する。この都市には、国際空港・港湾はもとより、レポート、国連大学、国際会議場、人類文化大博物館、地球博物館なども設置される。このマスタープランは国際コンペによって選ばれるが、そのさいプランには世界の主な村落や都市の類型を織り込み、また史上すぐれたユートピア計画も、なるべく多く反映させることが必要条件となる。建設資金には、各国のGNPに一定の比率をかけた年額を、長期間積み立てる。ジェオトピアの初期人口は100万、将来1,000万程度まで拡大の余地を残す。E.ハワードの故知にならって、土地の地代は国連の自主財源となる。これより詳しいことは上記著書にゆずるが、当初私はこの「地球人間都市」のオープニングセレモニーは、2001年に予定していた。しかしもう間に合いそうにもない。せめて、西暦は20世紀までで終りにして、新世紀は「地球暦」元年として迎えよう！ 欧化の歴史に幕を下して、個性あふれる民族模様がその美を競い合う、新しい世界を開こうではないか。その実現に向けて、「地図文化博物館」や「国際地域情報センター」の建設推進運動に努力している昨今である。どうかこの憂トピア運動費のためにも、マル優をつづけて下さい。(もし優がとれなければ、SDIを不可にして下さい。)

(立正大学)

武蔵野の自然

宮 脇 昭

武蔵野台地に代表される東京の植物的自然は、すでに文学的にも徳富蘆花の“自然と人生”や国木田独歩の“武蔵野”にとりあげられている雑木林と考えられていた。たしかに春4月から5月はじめにかけて日毎にねずみ色から浅黄、萌黄色さらに目の覚めるような新緑へと装いを改めてゆくクヌギ・コナラ林は美しい自然

に見える。また濃緑の夏から黄葉し、晩秋の木枯しに落葉して、青い冬の空に梢が突きささるような荒涼とした樹木も武蔵野の季観として、田園景観を特徴づけている。

しかし、未だ残されている静かな冬の雑木林の中を落葉を踏みしめながら散策すると、夏とは全く異った

植物の世界に驚く。あれほど深い緑蔭を夏の日形づくっていたクスギ、コナラ、エゴノキ、ヤマザクラなどの高木、亜高木のすべては落葉して裸の枝の間から林床まで冬の陽光が斜めに入りこみ、木々の幹の長い蔭をまばらに写している。低木も落葉し、草本植物もほとんど地上部は枯れている。しかし、林床のあちこちに冬も常緑のシラカン、ヒサカキ、モチノキなど育っている。また落葉の間に見えかくれしながらジャノヒゲ、ジュンラン、ヤブランやベニシダ、イタチシダなど何れも冬も緑の多年生草本植物も見出せる。

植物の世界でも、生きものはきびしい環境下で本性を發揮する。北半球では気候的には冬がもっとも植物にとってもきびしい。北海道、東北地方の大部分、関東以西で海拔700m以下は気候的には冬も緑の常緑植物からなり立っている照葉樹林帯である。

一体「武蔵野の雑木林」と古くから親しまれてきたクスギーコナラ落葉（夏緑）広葉樹林は、どのようにして成立し、今日なお存続しているのだろうか。冬季の植生調査や雑木林の中の散歩でもすぐ気付くように、現在ところどころで林内に芽生えている常緑広葉樹や常緑植物が実は武蔵野の立地本来の緑——自然林の姿——を暗示している。

すなわち、我々の植生調査結果では関東地方はもとより、日本各地、東南アジアをはじめ北半球各地のほとんどすべての地域は、長い間の人間活動の結果、現存植生はその土地本来の自然植生から大きく変ぼうさせられている。関東地方の海岸沿いの沖積低地は、浜離宮、芝離宮に発達しているようなタブノキの森で被われていた。比較的乾燥し易い斜面上部などは、スダジイ林で占められていた。芝白金の自然教育園の土塁口のシイ林は河離宮のタブノキ林と同様に今から200数10年前に

植えられた常緑樹林である。どちらも有名な江戸の火事にも、関東大震災、第二次大戦中の焼夷弾ショウライダンの雨の中でも見事に生きのびて、今日なお60数年前につくられた明治神宮のクスノキ、シラカン、ケヤキ林などと共に東京市街の中の緑のオアシスの役割を果たしている。

お茶の水大学に接している護国神社の森は、府中街道、甲州街道沿いの古い農家の屋敷林などのように常緑のシラカンが主になっている。最近の花粉分析結果からは約6000年前から関東地方でシラカン林が優先してきたことが明かにされている（宮脇編著1986：日本植生誌第7巻関東P.97）。しかし後氷期後期から先史農耕活動が盛んになり、照葉樹林が約2000年前から次第に減少し、全国的にはアカマツが増加しはじめたという（同上、塚田P.100）。

関東地方で照葉樹林が落葉広葉樹林に大きく移行したのは、木炭や薪を採るために15～20年に1回定期的な伐採が数100年以上の長い間くり返されたことによる。また当時化学肥料はなく、水田、畑の有機肥料、厩の糞草として毎年下草刈り、落葉掻きが行われてきた。したがって、照葉樹林帯の北限近くに位置する武蔵野などでは次第にシラカンの再生力が低下してきた。反面、自然状態ではより海拔高度の高い山地に自生していたコナラ、エゴノキなどが二次的に関東地方の台地、丘陵に下降してシラカン林におき代っている。萌芽力の強いクスギーコナラ林が、あたかも自然林のような状態で、実は長い間一定の人間活動と共存して特有の武蔵野の植物的景観を形成してきた。

しかし、今や雑木林も武蔵野から宅地造成などで急速に消滅を強要されている。

（横浜国立大学）

熱烈歓迎お茶大生

和田 明子

61年度前期の地理学特講がそろそろ終るころ、本務校のゼミ4年生の卒業論文中間発表会にお茶大の受講生の参加をよびかけたところ、彼女たちの気持のよい賛同をうけた。

夏休み明けの最初の土曜の午後（お茶大はまだ休み期間中）八王子セミナーハウスに、お茶大生と都留文科大地理ゼミ4年と3年生計30名が会合した。

都留大地理ゼミ9月の卒論中間発表は、卒論提出日まであと3ヶ月あまりの期間に、いかなる補足調査をし、本論を完成させるのか、そのきめ手をつかむきわめで重要なミーティングである。このようなゼミを他校とのインターゼミで開催したのは、私にとっても久しぶりのことであった。かつて長年つとめた東京都立大地理学科の学生と都留文科大地理ゼミとの地域調査の